

Kappa Novels



お願い—

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。あら、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編推理小説 ^{はい}灰 ^{おんな}の女

辛 400

昭和45年3月10日 初版発行

昭和48年10月5日 36版発行

著者 ^{たか}高 ^ぎ木 ^{あき}彬 ^{みつ}光
東京都渋谷区本町1の8

発行者 五十嵐 勝 彌

印刷者 堀内 文 治 郎
東京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替いたします。(明泉堂製本)

表紙の模様・意匠登録 116613 © Akimitu Takagi 1970

(分)0-2-93(製)02176(出)2271 (0)

長編推理小説・書下ろし

^{はい}灰 ^{おんな}の女

^{たか}^ぎ^{あき}^{みつ}
高木彬光



カッパ・ノベルス

目次

脅迫状の問題	129	第二の死者	113	尾行と脅迫	97	密室の発生	82	自発的出頭	70	現場検証	54	死体発見	41	事件当日	22	事件前夜	5
		真相	239	伝家の宝刀	227	発狂への道	211	告発	198	偽装	184	鉢植 ^{はちう} えの問題	170	微妙な立場	157	耳の中の声	143

イラストレーション

司^{つかさ}

修^{おさむ}

第一章 事件前夜

「これはなんだ？」

岩本義介は大きな眼球をむいて、ぎょろりと志賀貞彦の顔をにらみつけた。

額にはふといみみずのような青筋が浮かび上がり、頬のあたりは、一瞬に酒の酔いが出たように、かすかな赤みをおびている。

岩本義介という人間を知っている者なら、これが大噴火の前兆であることは一眼でわかるはずだった。もちろん志賀貞彦がそれを知らないわけはなかった。

「見ればおわかりでしょう。辞表です」

貞彦は必死に感情を殺した声で答えた。

これから不愉快な一幕が始まることはとうぜん予想している。しかし、彼はすんなりと武蔵商事をやめられる立場ではなかった。

とにかく、男が何度も何度も考え直した末に、ようや

く決心したことなのだ。いまさらあとへひけるものではない……

「なるほど、『今般、私儀……』、たしかに辞職願らしいな」

岩本義介は、わざとらしい口調で言う、手にした辞表をたたきつけるようにデスクの上にほうり出した。火山の鳴動、噴煙——まさに爆発寸前の状態だった。

「さあ『一身上の理由により』とあるが、その理由を聞かせてもらおうか？」

志賀貞彦は、相手の血ばった両眼を直視し、できるだけ事務的に——と、腹の中で前置きしながら口を開いた。

「私は最近、この仕事を続けて行く自信がなくなってきたのです。なんだか、すっかり疲れ切ったような感じがするのです……それに、私にはここでの仕事はどうやらむいていないようです。最近になって、ようやくそのことを自覚したのですが……」

「むいていない？ ふん、そんなことはなからう。君はいままで、自分の仕事をりっぱにやってのけて来た。わたしにとっては申し分のない秘書役だった。わしがそう認めている以上、なにもいまさら自信を失うことはないは

ずだ」

岩本は唇を歪めて笑った。

「まあ、疲れが出ているというのはほんとうかもしれない。一種のかういノイローゼだろう。休暇をやるから、十日ぐらい、どこかで遊んで来てはどうだ？」

貞彦は大きく首を横にふった。

「ご厚意はありますが、私もここへ来るまでにはずいぶん考え、相当な決心を必要としたのです。決して一時の気の迷いなどではありません。たしかにこれまで私は大過なく仕事をやり通して来たつもりです。しかし、そのためにはずいぶん無理も続けて来ました。無理に無理を重ねてゆけば、いつかは破綻も生じます……」

「無理だと？ 君はわしといっしょに働くのが、それほど無理だというのかね？」

岩本社長は、低いおし殺したような声でいった。

「正直なところ、私の気持ちのうえで、かなりの無理があったことは否定できません。もちろん、社長個人に対する感情の問題ではなく、仕事の性質上……」

「ふん、君はまるで、わしが人殺しや泥坊の仕事を言いつけたような言い方をしているな。たしかに、多少微妙

な性質の仕事でもないではなかったが……学校を出たての青二才じゃあるまいし、いまさらなんでそんなことを言い出すんだ？」

学校——というところに、岩本はいくらか力をいれていた。その意味は貞彦にもよくわかっていた。

「あなたは、私のことを恩知らずなやつとっておいでなのでしょ……」

苦いものを吐き出すような調子で、貞彦は続けた。

「私が大学二年のころ、父が突然死んだとき、借金は山のように残されていました。もちろん、あのころの私にはどうにも方針は立ちませんでした。どうしてこの窮地をのがれようかと、途方にくれていたときに、救いの手をさしのべてくださったことに對しては、いまでも感謝の気持ちでいっぱいです。親類といってもそれほど近い関係でもないのに、あなたはその後の私の学資の面倒まで見てくださいました。その恩義は、決して忘れられるものではありません。しかし、こうしてあなたの秘書を勤めていたこの何年かの間に、そのご恩の何分の一かはお返しできたのではないでしょうか？」

「なるほど、君はそういうドライな男だったのかね？」
岩本義介は、眼をぎらぎらと光らせた。

「何分の一と謙遜^{けんそん}はしているが、正直なところ、君は元金に利息をつけて返したつもりでいるのだろう。このあとには勝手にさせてもらおう——と、そう言いたいのだろう。まるでわしが、いやがる君に恩を売って、むりやりにこの仕事をおしつけたように聞こえるが……君のせりふこそ、ずいぶん恩着せがましいじゃないか」

「決してそういう意味ではありません。ただ私は……」
「いったい、君は何が不満なのだ？」

がっしりした体を椅子^{いす}から浮かせ、岩本はデスクの上に身をのり出して来た。

「君は……わしを脅迫するつもりか？」

「脅迫？」

「給料をあげろというのか？ それとも、早く重役^{じゆうやく}にしてくれとでもいうのか？ まとまった金がほしいのか？」

「私はべつに……」

「もちろん、わしは君から脅迫されたところで屁^へでもない。たしかにわしも事業家だから人にあまり知られたくない秘密もないとは言えない。しかし早い話が、税金を一円もごまかさずに、真正直におさめる阿呆^{あほう}な経営者は天下に一人もおらんだろう……君は、わしが心からの信

頼を寄せていた、腹心の秘書だったよ。いや、自分の子供のようなものだった。とうぜん、君は、いろいろなわしの秘密を知りぬいている。いま、君はそれを逆用して……」

「とんでもありません……私はあなたに対して何一つ要求を持ち出したわけではないでしょう。ただ、この会社をやめさせていただきたい——とお願いしているだけです。もちろん、ここをやめたところで、あなたのいままでの信頼を裏切るような真似は決していたしません」

窓からさしこむ秋の夕陽が、部屋の中の空気をオレンジ色にそめていた。その光をうけて、義介の顔はまた一段と赤みをましたように見えた。

「なるほど、君にしたところで、まっこうから脅迫がましいせりふを吐くほどの馬鹿でもないだろうから……それでは、はっきり言ってもらおう。ここをやめたいというほんとうの理由はなんだ？ 脅迫でないのなら、もっと率直にそのわけを話したらどうだ？」

「ですから、最初にお話ししたとおり……」

「また、愚にもつかめたわ言を繰り返すつもりなのか？ ふざけるな！ 君はこのわしをなめているのか？」

「そんな……なめるどころか……」

恐ろしい男だと思っています——という言葉を、貞彦はやっと喉の奥にのみこんだ。

たしかに岩本義介は、恐ろしい人物に違いなかった。いま考えてみれば、自分の窮境を救ってくれたのも、ただの親切気や義侠心から出たものではないような気がするくらいだった。文字どおり、恩を計算ずくで売り、自分を腹心の部下に育て上げるための布石を打っていたのではないか、と思われるふしもある。それぐらいの深謀遠慮は、この男には、本能的にそなわっている知恵なのだ。

貞彦は自分がこれまでに果たして来た不愉快な仕事の数々を思い浮かべた。合法と非合法の境界をはるかに非合法の側に越えた仕事——警察の調べをうけて、冷や汗を流したことも一度や二度ではない。

人によっては、そういう仕事も、スリルがあって面白い——と感じるかもしれない。しかし、平凡な男である貞彦にとっては、それは神経をたばねて、たわしのかわりに床をこするような思いの連続だった。もし彼に対する恩義ということを思わなかったら、とっくの昔に辞表をたたきつけていたろう。

しかも、こうした仕事に耐えて、将来大きくむくいら

れるものがあるだろうか？

それは大いに疑問だった。

最近、自分が「知りすぎた男」になってしまったことに対して、岩本義介がかなり警戒的な態度をとっているのは彼にもよくわかった。どんなに控え目に判断しても、いままでとは違った気まずい空気が、二人の間にたちこめて来たことは事実だった。

いずれは自分の後継者に——という最初の岩本の甘い言葉も、いまではどこかへふっとんでしまったようだった。彼のほんとうの腹は、自分を一生飼殺しにすることにあるのではないか——と貞彦は思いはじめた。

いや、へたをすれば、何かの事件が発生したときに、因果を含められて、人身御供の役をおしつけられないとも限らない。その可能性も決して小さいとは思えなかった。

それに、たとえほんとうに岩本の後継者になれたとしても、それがなんだというのだろうか？　こんな得体の知れない会社の社長におさまって、毎日毎日、綱渡りのような人生を送るのが、はたして幸福なのだろうか？

貞彦の胸には、いつごろからか、そういう疑念が芽ばえていたのだ。

たしかに金には困らないだろうが、そのための犠牲、そのための代償を考えれば、それは決してとびつきたくなるような地位ではない……

もちろん、彼が今度辞表を出す腹をきめたのは、それだけの理由ではなかった。もっと重大な、もっとさしせまった動機が彼を動かしたのだった。

人生の大きな岐路に立って、彼は結局、たとえ貧しくても平凡で幸福な生活を求める道を選んだのだった。ただ、ある意味では、それは必ずしも「平凡」とは言い切れなかったかもしれないが……

「さあ、はっきりしたまえ。何をぼやぼや考えている？」

岩本の声が貞彦を現実の世界にひきもどした。

「君に対しては、君たちの年齢のふつうの会社員のほぼ二倍のサラリーを払っているんだよ。それでもまだ不足だというのなら、いったいいくらほしいのか、堂々と要求を出してはどうだ？ 辞表なんて、芝居がかった真似はするな」

「私は本気です。本気でやめたいと思っているのです。はっきり理由を申し上げれば、この仕事がいやになったという以外にはありません」

なかば無意識のうちに、きびしい言葉が貞彦の口から

流れ出していた。

「あなたはさっき、事業家という言葉を使われましたね。あなたがほんとうの事業家だったら、実業家なら、私はどんな仕事をさせられても、決していやとは言わなかったでしょう。実際、税金のごまかしぐらいで眉をひそめるほど、私も潔癖な人間ではありません。しかし……率直に申し上げて、私は虚業家や無業家のお手伝いはもうこれ以上……」

「き……きさま！」

みるみるうちに岩本義介は形相を変えた。デスク一つをへだてていなければ、たちまちおどりかかって来て、首をしめ上げかねない感じだった。

そのとき、貞彦はこの相手に、心底からの恐怖を感じた。いかになんでも少し言い過ぎた——と思ったが、もう完全にあとの祭だった。

「よくも……よくも、きさまはこのわしに対して、そんな口がきけたものだ……命の恩人——と言ったせりふは、どこへ行ったのだ？ この恩知らず、恥知らずめが！」

火山はついに爆発したのだ。われ鐘のようなどら声が部屋中にひびき渡った。

「きさまがその気なら、わしにも覚悟があるぞ！ わしを甘く見るのもたいがいしろ！ きさまのようなやつは殺して……」

意識してのことかどうかしれないが、岩本義介はデスクの上にあった重い文鎮をわしづかみにしていた。貞彦は一瞬戦慄した。いまにもそれが自分の頭めがけてとんで来るのではないかと思ったのだった。たしかにこの男がほんとうに怒り出したなら、何をするかわかったものではない……

「社長……」

そのとき、この社長室のドアをあけて、営業部長の井口登（いのけのぼる）がはいって来た。どう見てもあまり切れるタイプではなく、ただ岩本に対して犬のように忠実なだけにとりえ——といった感じの人物である。宴席などに出ると、いい年をして、岩本のご機嫌をなんとかとり結ぼうと、まるでたいこもちのような真似を平気でやる。やせた貧弱な裸体をさらけ出して、珍妙無類な踊りをやらかすところなどは、見ていても涙ぐましいくらいだった。

「いや、これは……」

井口登は、二、三度わざとらしくまばたきした。何かの用事で社長のところへやって来て、思いがけない場面

に出くわし、はたと当惑したという思い入れだろう。むしろほんとうは岩本のどなり声を耳にして、いったい何事かとすっとんで来たのに違いないのだが……

「志賀君、どうしたというのだね？ 何かしくじりでもやらかしたというのなら、素直に早くあやまりたまえ……社長、深いわけは存じませんが、ここはひとつ、私に免じてお許しくださいませんか……」

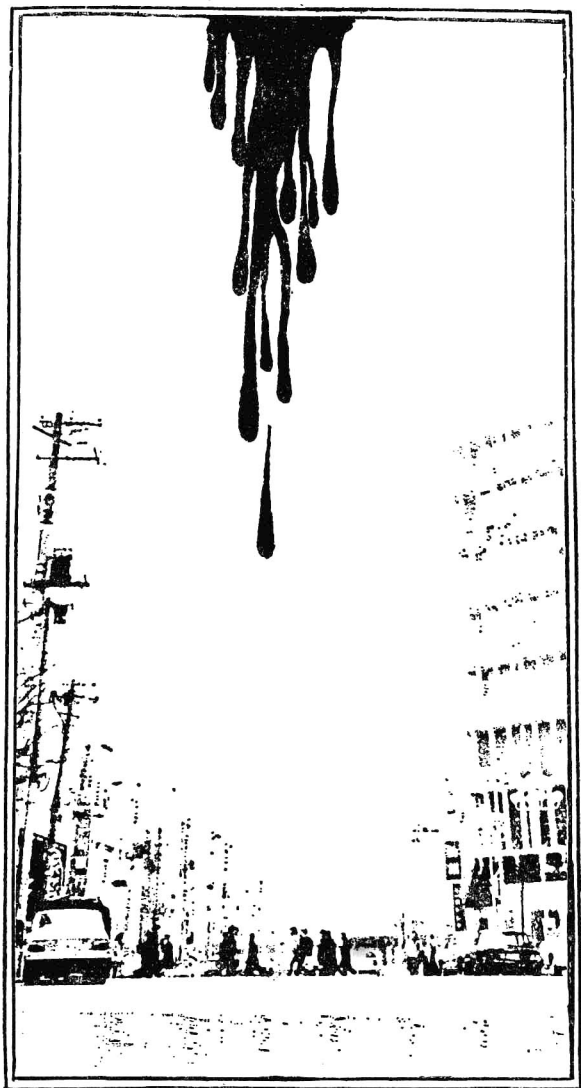
井口に本気で貞彦をかばう気がないことはわかりきっていた。社長側近の貞彦に対して井口が抱いているものは、嫉妬（しよと）と警戒心と、それにへたな喧嘩をしても損だという打算以外にはないはずだ。ここへ顔を出したのも、場合によっては貞彦の足をひっぱり、場合によっては恩を売り、どっちにせよ、自分がいい子になろうとしているのだろう。

「わけも知らずに口を出すな！ 君などむこうにひっこんでいろ！」

岩本の大喝をあびせられて、井口はとたんにちぢみ上がった。

「ですが……社長、もうそろそろ加藤（かとう）さんとお約束の時間ですから、今日のところはひとまず……」

岩本は苦い顔をした。このあとで、彼が商用で人に会



うことになっているのは、貞彦もよく知っていた。そして岩本は実業にせよ虚業にせよ、ともかく商売のことは一瞬も忘れたことがない男だった。

「今夜一晩、頭を冷やしてもう一度よく考えてみる。いか、わしをなめてかかると、とんだことになるぞ」そう言つて、岩本は貞彦のほうにくると背をむけてしまった。脅迫というのなら、そっちのほうがよほど脅迫的じゃないか——と貞彦は思った。

「社長……」

またしても井口がしゃしゃり出て、何か言いかけたのを黙殺して、貞彦はそのまま部屋の外へ出た。こうして腹をきめてしまうと、武蔵商事の中の空気は、もう一時間間もがまんできないほど、不愉快なものに感じられた。ピエロのような井口部長は、たえて言えばそのシンボル……この会社には、こんな程度の営業部長がふさわしいのだと思うと、貞彦は唾を吐きかけてやりたくなつた。

時計の針は十時をさしていた。

脇坂則子は、黙って茶の間にすわったまま、とりとめもない思案にふけていた。激しい苦しみと、燃え上

るような情熱と、不安と期待が入り乱れて、その胸の中で渦をまいていた。

客間では、いったいどんな話が進行しているのだろうか？

夜の九時半の不意の来客——急用だということとは間違いなかった。そしてそれは、自分たちには関係のないことだろうか？

客は岩本義介だった。玄関へはいって来たときのその顔は、いつもとすっかり変わっていた。何かにひどく腹をたてているように、恐ろしく不機嫌な表情だった。

もともと、則子は岩本に対して好意を感じたことはなかった。じつと見つめられると、アレルギーでも起こったように、わけもなく体がふるえるくらいだが、今夜は特に、この人物が恐ろしかった。それは自分の罪の意識から出たものであることは間違いなかったが……

則子は心に秘めた恋人の顔を臉に思い浮かべた。志賀貞彦は腹をきめたと言っていた。近いうちに、岩本に辞表をたたきつけるつもりだとも言っていた。彼はとうとうそれを実行したのかもしれない……

しかし、その当の相手が、こうして突然、夜遅く訪ねて来たのはどういうわけだろう？ 彼にしてもまさかこ

の段階では、自分たちの仲のことを、岩本にもらしたはずはないのだが……

「則子……」

廊下のほうから、夫の武雄たけおの声が聞こえて来たので、則子はあわてて立ち上がった。

「お客さまのお帰りだ」

則子が出て行ったとき、岩本義介はもう玄関先で靴をはきかけていた。立ち上がって振り返った彼は、ぎらりと眼を光らせて、

「いや、奥さん、夜分おさわがせしてすみませんでしたな」

と言いながら、こちらの心を探るような視線をあげかけたのだった。

「なんのおかまいもいたしませんで……」

と答えながら、則子のかすかに身ぶるいした。何かあったな——という不安が、一瞬胸の中にうなりをあげて駆けめぐったのだ。

「常務さん、それでは失礼いたします。いまお話ししました件につきましては、くれぐれもよろしくお願いいたします」

岩本はていねいに頭を下げた。武雄は、わかったとい

うように、かるくいくらか横柄にうなずいて、
「私にできるだけのことはいたしますから」
と答えた。

貞彦から話に聞いている岩本と、いま夫の前に立っている岩本とは、まるで別人のようだった。しかし、それが逆にこの男の本性を雄弁に物語っているのだろう——と則子は思っていたのだった。

「何か急なご用でしたの？」

岩本がドアを閉じて立ち去ったとたん、則子はおそろる夫にたずねてみた。

「うむ、仕事のことでな……それに岩本さんは飼犬に手を噛かまれたと言って、だいぶ興奮していたよ。岩本さんの秘書の志賀貞彦を知っているだろう？ いや……さみが知らないはずはないな」

則子は、とたんに全身がこわばってゆくような気がした。夫の言葉が針のように鋭く胸を突き刺したのだ。最後の一言は、べつに他意もなさそうな調子だったが、自分たちのことがとうとう明るみに出たのではないか——という不安はますます濃くなったのだ。

もちろん、いつかはどこかではっきりさせなければならぬことだった。そして、その時期が眼前にさしせま

っていることも事実だった。貞彦が自分の決意を実行に移したとすれば、自分もとうぜん覚悟をきめてかからなければいけない……いや、いまさら覚悟をきめるのきめないのという段階ではない。

しかし、そうはいうものの、夫のほうからこの問題を切り出されることを、則子は本能的に恐れていた。離婚を申し出る腹をきめていながら、自分の不貞行為がばれはしないかと、毎日のようにおびえていた。人妻としての罪の意識——それはどこまでも、その心にまとわりついて離れなかった。

「ところで……」

茶の間のほうへもどりながら、武雄はいつもと同じような、なんの感情もあらわさない声で言った。ずぶといのかおとなしいのか、ちょっと見当のつきかねる異様なまでの冷静さが、脇坂武雄の最大の特徴だった。

「言い忘れていたが、明日、僕は急用で関西へ行くことになった。せいぜい二日もあれば用事はかたづくはずだし、たいした支度もいらないが……スーツケースに着替え程度の用意をしておいてくれたまえ」

「はい……」

則子は貞彦の話があっさり打ち切られたので、いくら

かほっとしながら答えた。武雄はかすかに奇妙な笑いを浮かべた。

「うれしいかね？」

「え？」

則子はまたしても心臓が凍りつくような気持ちになった。

「何がですか？」

「僕の出張がさ」

相変わず、武雄の顔には表情らしい表情も浮かんではいなかった。則子が夫に対して何よりも無気味なものを感じるのは、まさにこういう点だった。結婚後もう三年にもなろうというのに、夫が腹の中で何を考えているのかさっぱりつかめなかったのだ。

「何をおっしゃるの？ あなたの出張が、どうして、わたしにとってうれしいわけがあって……」

「いやね、年がら年中、旦那の世話をやいているのも、しんが疲れるものだろう。たまには息ぬきがしたくなくても無理はないさ。世の中の女房族というのは、たいいそんなものらしいが……」

則子は弱々しい笑いを浮かべた。なんとも返事のしようもなかった。

「これがふつうの家庭なら、旦那を会社へ送り出したあとは、奥方はデパートへでもどこへでも、好きなどころへ出かけて行って、夕方までに帰ってくればすむわけだが……家には口のうるさい小姑^{ここやう}やら、やかましやのばあさんなんかがいることだし、きみもそうそう簡単に気晴らしにも出かけられまい。考えてみれば、僕なんかと結婚したのが気の毒みたいだったな」

この言葉がいたわりなのか、それとも皮肉なのか、やはり則子には見当もつかなかった。ただ、いつものように、針のむしろにすわらされているような、なんともいいたまれない気持ちになっただけだった。

「なんですの、いまさら……さあ、明日出かけるんだったら、もうおやすみなさいな」

「そうだな……明日は十時に会社の車が迎えに来ることになっている。それで羽田へ直行するんだし、べつに早寝をする必要もないんだが……ちょっと眼を通しておきたい書類もあるからひっこむとするか。きみの邪魔をしても悪いからな」

夫の後ろ姿を見送って、則子は唇を噛みしめた。この最後の言葉にしても、考えようによっては、あてこすりみたいな感じもしないではない。

結婚してから、武雄は声を荒だてたことも、手を振り上げたことも一度もないくらいだった。何か氣にいらないことでもあると、ちらりと皮肉なせりふを吐くだけ。その皮肉にしても、無神経な人間には、ほとんど感じないだろうと思われる程度だった。しかし、そのちらりとした皮肉には、なんともいえない毒氣が含まれているのだった。思い過ぎといえればそれまでの話だが、少なくとも則子にはそんな氣がしてならなかった。

事実、脇坂武雄は決しておとなしい一方の人間ではなかった。ワンマン社長の矢島彰^{やじまあきら}の下で、同族会社の色彩を濃くしている東新物産^{とうしんぶつさん}では、社長の甥^{ねい}というような武雄の血縁関係はたしかに有力なものに違いなかった。しかし、ただそれだけのコネで、四十前に常務になれるほど会社の内部も甘くはない。武雄がそれ相応の実力をそなえていることは誰しも否定できない事実だった。

結婚したてのころ、何かのおりに自宅へ訪ねて来た若い社員などが、夫の前ですっかり堅くなり、ひどくおびえているような様子なのを見て、則子はふしぎに思ったことがある。仕事の面ではすこぶるきびしいらしい夫の一面を見て、意外な感に打たれたこともある。それも社内の人間だけではなく、たとえば岩本義介のような年上